

平成二六年度 第四九回卒業証書授与式 式辞

厳しかった冬の寒さもようやく和らぎ、春の息吹を感じるこの佳き日に、長野市教育委員会様を始め、御来賓の方々のご臨席のもと 長野市立篠ノ井東中学校「第四十九回卒業証書授与式」をこの様に盛大に挙行できますことを、卒業生と共に、厚く御礼申し上げます。また、諸事情ある中、卒業証書授与式に間に合わせて、この体育館「励志館」を完成して頂いた関係の皆さまに心より感謝申し上げます。

保護者の皆様方、お子様のご卒業おめでとうございます。お子様の立派に成長された姿を前にして、今様々なご苦勞が心に浮かんでいることと存じます。「這えば立て 立てば歩めの親心 わが身につもる 老いを忘れて」とよく申します。小さい頃から、君たちの成長を祈り見守り、支えてきたのは後ろに座っているお父さんやお母さんです。雨の日も、風の日も、暑い夏も、寒い冬も、君たちの笑顔を喜び、ふさぎ込んでいたら心を痛め、ひたすら君たちの成長を願いこの日を心待ちにしてきました。本当に心をこめて「ありがとう」をいってほしいと思います。

さて、一四五名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。君たちとは、たった一年の付き合いでしたが、私の心に深く刻まれた一年間でした。決して便利とはいえない仮設校舎にあって、学習活動はもとより、部活動、学校生活においても、あるいは生徒会活動においても、先輩として私は非常に良かった、いい三年生であったと思います。とりわけ私の記憶に深く刻まれているのは、桐章祭の合唱コンクールです。胸の奥深くから発せられたやわらかい歌声に時を忘れました。優秀賞を受けた学級の歓声が今でも耳に残っています。また、惜しくも届かなかったクラスの幾人かが涙した光景も忘れられません。君たち三年生は、共に手を取り合い、心をつなげてやれば、ここまでできるのだということを後輩達に素晴らしい手本として示したと思います。何事につけても真剣であり、誠実であり心をいつも揺り動かされてまいりました。私は君たちと出会えて本当によかったと思っています。そういうみなさんであったからこそ、最後にあたって「初心忘るべからず」という言葉を臆に贈りたいと思います。

「初心忘るべからず、是非初心忘るべからず、時々の初心忘るべからず、老後の初心忘るべからず。命には終わりあり、能には果てあるべからず」（世阿弥）

能というのは謡曲に合わせて面をつけて舞をまう芸術です。皆さんもテレビなどで見たことかと思いますが、その能の開祖ともいべき方が世阿弥です。その世阿弥の言葉です。

初心というのは字の通り初めの心です。事に当たって、あるいは仕事をするにあたって、本当に決意して物事にぶつかっていくときには、これこそ命がけ、真剣勝負、あるいは無我夢中でそのものにぶつかるはずで、それを初心といいます。能においては、上手に舞う人もいれば、まだ舞い方が未熟な人もいます。けれども世阿弥はその能の舞う姿の中に「花があるかどうか」ということを言っています。どんなに上手に舞っても、そこに真剣さがなければ「花がない」、舞い方は未熟であっても真剣に舞っていればそこに「花がある」といっ

ています。「是」というのは上手に舞うということです。「非」ということは未熟な舞い方です。舞い方が上手であったにしても未熟であったにせよ、真剣に舞え、命がけで舞え、これが「是非初心忘るべからず」です。是であれ、非であれ、とにかく初心で舞えということです。

次に「時々の初心忘るべからず」というのは、段々舞いが上達してまいりますと、人間というものは弱いもので、上手になればなるほど放漫になってまいります。人にちやほやされたり、ほめられたり、おだてられたりすると、自分も実力以上に胸を張ってしまったりするものであります。けっしておごりたかぶることなく実力がつけばつくほど、実力があると人に言われれば言われるほど謙虚にやる。このことが「時々の初心忘るべからず」です。その時、その場にあたって真剣にやれと、これが「時々の初心忘るべからず」です。

「老後の初心忘るべからず」というのは、達人になってもということです。これは皆さん今の年齢からすればずっと先になりますけれども、修業を積んでいくと年もしてくるし力もついてまいります。けれどもどんなに年をしても初々しい心でぶつかれ、初々しきですね。初心に立ち返ってぶつかれ、これが「老後の初心忘るべからず」です。

今日は晴れの卒業式、ほとんどの人が高校へ進みます。中には、長野を離れて旅立つ人もいます。環境が今までと変わってきます。甘さは許されません。人間関係も変わってまいります。そんなときに、苦しいことがあっても、悩みがあっても、本当に泣きたいほどせつないことがあっても、今日ここで、晴れの卒業をして今後しっかりやろうというその初心に立ち返っていただきたい。そう思います。

君たちが生きるこれからの時代は、変化の激しい、混沌とした時代になることは間違いありません。しかし、どんな困難な時であっても君たちは本校で学んだ事を基礎にして、これからの人生を力強く生き抜いてくれるものと、信じております。

大空へ羽ばたこうとする鳥は、大きく翼を広げて、「空高く舞い上がろうとする力」を最大限に得ようとしします。君たちにとって、その『翼』に当たるものは、一人ひとりが持っている自分の『夢』であり、『希望』に他なりません。『夢を語る人であれ』『希望を持ち続ける人であれ』君たち一四五名は、私の、篠ノ井東中学校の、『誇り』です。君たちの前途に開ける『未来』に、期待と思いを馳せながら、私の式辞とします。

平成二七年三月一九日

長野市立篠ノ井東中学校長

木村公男